

つくりあげる力となるものかもしれない。そして、この自己主張のあらわれは、『医心方』の世界においてすでにみられる中国の医学書に対する批判精神や実践主義的傾向とあいまって日本の医学が方向づけられていくのではないだろうか。

(国立東京第二病院)

「麻疹」名義考

三井 駿 一

『聖恵方』(九七八—九九二)には「小児疹豆瘡」の条¹が立てられ、麻疹と痘瘡を混載する。題目の「疹痘瘡」は麻疹と痘瘡の総称である。本書では両者を共に積熱に原因するとし、積毒の所在の相違に基づいて発症が異なり、それが腑に在る時は「細疹」を生じ、臓に在る時は「痘瘡」を発生²とした。『聖濟總錄』(一一一一—一一七)では「小児瘡疹」の条があり、邪が府に在る時は「細疹」を発生し、これを俗に「麸瘡」と呼び、邪が蔵に在る時は発生して「豆瘡」となり、俗にこれを「疱瘡」と呼ぶとする。以来この病因、病理論は⁴改変を経ながらも清朝を貫き、またわが国の旧医学にも多大の影響を与えた。

『幼幼新書』(一一五〇)には「府ニ伏スルノ熱、「細疹」ヲ生ズ、「赤瘡」ナリ。俗ニ「麻子」ト呼ブ、蔵ニ伏スルノ熱、「豆瘡」ヲ生ズ、形、豌豆ノ如シ」を載せる。⁵『三因

方』(一一七四)は痘瘡を「斑瘡」と呼び、俗称を「豌豆」、麻疹を「膚疹」、俗称を「麻」と記述し、聞人規は『痘疹論』(一一三三)で、痘瘡を「瘡痘」、麻疹を「膚疹」と呼ぶ。虞搏は『医学正伝』(一一一五)で痘瘡の俗名を「豌豆」、蔡維藩は『痘疹方論』(一一一八)で痘瘡を「痘瘡」、麻疹を「疹子」、「膚疹」、その俗名として「麻子」、「沙子」を挙げ、万全は『片玉痘疹』(一一四九)で「麻疹」の俗名を「麻子」、痘瘡を「痘瘡」とし、龔信は『古今医鑑』(一一七六)で「痘瘡」、「麻疹」の病名を用いた。⁶

方言を記録したのは王肯堂と張介賓(ほぼ一五六三—一六四〇)で、前者は『証治準繩』(一一六〇二)に、麻疹を北人は「糠瘡」、南人は「麸瘡⁷」、呉人は「痧」、越人は「瘡」と呼ぶとし、後者は『景岳全書』(一一七一一)で「痘瘡」の俗名を「天瘡」、「麻疹」について蘇松で「沙子」、浙江で「醋子」、江右、湖広で「麻」、山陝で「膚瘡」、「糠瘡」、「赤瘡」、北直で「疹子」と呼ぶと述べる。更に多紀元簡の『麻疹纂要』(一一八〇三)は『瘍医大全』(一一七七三)を引いて、京師内外で「温疹」、河南で「痒瘡」、山西、陝西で「糠瘡」、山左で「疹子」、江南、浙江で「痧疹」、湖広、江

西で「麻疹」、「皦子」、福建、広東、広西、雲南、貴州、四川では共に「疹子」と呼ぶとする⁸。

「麻」について『三因方』は「細粟麻ノ如シ」と言い、郭子章の『博集稀痘方論』(一一五九七)に「疹ハ俗ニ之ヲ麻子ト謂フ也、痘ノ形状ハ最モ大ニ、水痘ハ之ニ次ギ、麻子ハ最モ小ニ、隱隠トシテ麻子ノ如キ也」とする。

麻疹を意味する「疹」は『聖恵方』に初出するが、「疹」は疹の別字で「積名」の「展也、之ヲ痒搔スレバ捷ニ展起スル也」に従うと、蕁麻疹がこれに当る。『聖恵方』の「疹」が北直の方言「疹」に由来したかどうかは明らかでない。唐代までの麻疹発疹を「瘡」と呼ばれたに対し、宋代になって「疹」と替えられたのは、その発疹が最早表皮の糜爛もしくは破壊を招くものでなくなったことを意味しよう。

註

- 1 本条には「赤瘡子」の名で一方を掲げる。麻疹の旧名である。
- 2 両書共成人については「発斑瘡」と「豌豆瘡」に分別し、それぞれ麻疹と痘瘡を述べる。
- 3 俗名を挙げるのは、著者は麻疹と痘瘡に対し、共通の病因に

よつて起り、その相違は病因の体内所在の相違に従い、発症の相違として現われるとの理解を堅持するものであるから、麻疹と称え、痘瘡と言ふのは医家として取るところでないとの意であろうか。

4 『聖濟總録』では胎児身体の汚染については触ていないが、銭乙（ほほ一〇二〇—一一〇〇）は母体の五臓に由来する悪血が急性発疹症として、体外に逐一排出せられるとの病理論を説く。陳文中の『小兒痘疹方論』（一二二五）に胎毒の文字が初出し、銭氏と全く同一の見解を示す。胎毒論は急性発疹症成立について以後支配的役割を演じる。

5 引用源を「疹痘」とする。張渙の『小兒方』（一二二六）に出るか。

6 銭乙から明末清初に至る医書について用語は混乱し、豆麻の別を確認することは必ずしも容易でない。

7 歎と膚は同音同韻。

8 『証治準繩』の「斑ナル者ヲ俗ニ瘡子ト謂フ也、疹ナル者ヲ俗ニ麻子ト謂フ也」に依ると、麻疹発疹は南北で形状の大小を異にしていたと思われる。

9 『小兒痘疹方論』の「水痘ヲ治ス」項下に「然レドモ水痘ハ多ク表邪ニ属ス」とあつて痘瘡の邪が深部に伏在すると発症病理の異なることをしるす。王綸は『明医雜著』（一五〇二）で痘瘡を水痘に對し、大痘と呼ぶことを述べる。

付記

麻疹を瘡と作るのは概ね清初から見え始める。痘に倣つた新造

瘡

字であろう。『康熙字典』に載せていない。文明一六年（一四八四）の痘瘡と麻疹の流行を『多聞院日記』にしろされるが「ハシカ」を瘡とする。恐らく瘵（疹）のくずしを筆写の際に読み誤つたもので、瘡が麻疹を表現する例は他に見当らない。

（帝塚山学院大学）